学習成果の自己評価〔保育学科〕

保育学科では、学生の学習成果を量的・質的データとして測定する仕組みとして、直接評価（定量的指標）となるGPA分布、単位修得率、資格取得率、退学・留年率、学位取得率、就職率、学習時間、教育・保育実習評価を実施している（備付-17）。また、間接評価（定性的指標）として、「保育学科学生アンケート」(1年生)、「学生アンケート」(1・2年生)、「卒業生アンケート」、学生による授業評価、雇用者へのアンケート調査等がある。「保育学科学生アンケート」(1年生)、「学生アンケート」(1･2年生)、「卒業生アンケート」では、学生による自己評価を2年間の学習成果として測定している。平成22年度に保育専攻では、「保育・教職実践演習(幼稚園)」の科目が新設され、「学習成果の自己評価」により、学生による自己評価を半期ごとに実施することとした。また、令和元年度から「学習成果の自己評価」の結果を一人一人に配布し、学習成果の獲得状況をフィードバックしている。さらに、平成30年度から学生自身による学習の達成状況を点検・改善するツールとして、ポートフォリオと一部実習科目においてルーブリック評価の導入を実施した。保育学科の教育目的・目標の達成に向けて、学生の学習の履歴と学習成果の蓄積などの情報を活用するポートフォリオや、評価する側と評価される側の認識が共有されるルーブリック評価を活用することで、学生・教員双方が学習成果の獲得状況を測定できるよう努めている。

保育学科では「学習成果の自己評価」を平成23年度から改善を重ねて実施してきた。令和4（2022）年度卒業生は、実習を経験する前のⅠ期：1年生の8月、Ⅱ期：1年生の2月、Ⅲ期：本実習を全て終えた2年生の9月（幼稚園・保育所実習Ⅰ・保育所実習Ⅱ・施設実習が概ね終了後)、Ⅳ期：就職活動を経験し保育実践研究を作成し終えた2月に、「学習成果の自己評価」を実施した。保育者に必要な資質能力についての自己評価で、＜人間性＞＜他者との協力＞＜コミュニケーション＞＜幼児教育についての理解＞＜保育についての理解＞＜子どもについての理解＞＜基礎知識・技能＞＜保育実践＞＜課題探求＞の9領域について4段階で評価している。

4：十分に理解(習得)できた　　3：おおむね理解(習得)できた

2：理解(習得)に努力を要する　　1：一層努力を要する

教育課程半期終了ごと自分自身の状況を評価し、到達度を省察した結果は下記のとおりである。

次の表には2021（令和3）年度入学生における「学習成果の自己評価」のⅠ期とⅣ期の結果の比較を示した。例年、Ⅰ期とⅣ期の平均得点の比較では、9領域全てにおいて上昇している結果が示されていたが、今回の結果では、＜他者との協力＞における2つの項目（「他者意見の受容」、「他者との連携・協力」）で有意な低下が示された。また、有意な上昇が示された項目は、＜保育についての理解＞における「保育の理念・保育史・思想の理解」、＜教科・教育課程に関する基礎知識・技能＞における「教育課程・保育課程の構成に関する基礎理論・知識」、＜保育実践＞における「保育構想力」であり、他の項目については、大きな変化は見られなかった。

表　Ⅰ期（1年次8月）とⅣ期（2年次2月）の比較

領域	項目	Ⅰ期 (1年次8月)		Ⅳ期 (2年次2月)		Ⅳ－Ⅰ
		M	SD	*M*	SD	
人間性	自分の性格に関する自己理解	3.21	0.69	3.22	0.61	0.02
	自分の行動特徴に関する自己理解	3.14	0.62	3.12	0.69	-0.02
	向上心	3.19	0.74	3.19	0.67	0.00
他者との協力	表現力	3.19	0.70	3.09	0.72	-0.10
	他者意見の受容	3.47	0.60	3.28	0.60	-0.19
	保護者・地域との連携協力	3.43	0.65	3.27	0.68	-0.16
	共同保育の実践実施	3.22	0.68	3.16	0.66	-0.05
	他者との連携・協力	3.57	0.55	3.23	0.64	-0.34
	役割遂行	3.25	0.64	3.24	0.58	-0.01
コミュニケーション	発達段階に対応したコミュニケーション	3.10	0.63	3.11	0.66	0.01
	子どもに対する態度	3.46	0.64	3.44	0.64	-0.02
	公平・受容的態度	3.38	0.62	3.36	0.60	-0.02
	社会人としての基本	3.30	0.64	3.21	0.63	-0.09
幼児教育についての理解	教職の意義	3.31	0.60	3.18	0.55	-0.13
	教育の理念・教育史・思想の理解	2.89	0.80	2.97	0.58	0.09
	学校教育の社会的・制度的・経営的理解	2.86	0.79	3.01	0.58	0.15
保育についての理解	保育の意義	3.30	0.59	3.18	0.60	-0.12
	保育の理念・保育史・思想の理解	2.86	0.72	3.04	0.60	0.18
	保育の社会的・制度的・経営的理解	2.91	0.73	2.99	0.60	0.08
子どもについての理解	心理・発達論的な乳幼児の理解	3.17	0.68	3.03	0.59	-0.14
	クラス集団の形成	3.12	0.69	3.07	0.63	-0.05
	子どもの状況に応じた対応	3.05	0.82	3.03	0.63	-0.02
教科・教育課程に関する基礎知識・技能	保育内容5領域	3.09	0.67	3.16	0.60	0.07
	幼稚園教育要領・保育所保育指針	2.93	0.74	3.03	0.62	0.10
	教育課程・保育課程の構成に関する基礎理論・知識	2.83	0.74	3.02	0.62	0.19
	情報機器の活用	2.88	0.71	3.01	0.61	0.13
	保育の指導法	2.91	0.73	3.03	0.62	0.13
保育実践	保育構想力	2.80	0.68	3.04	0.64	0.24
	教材開発力	3.03	0.69	3.12	0.62	0.10
	保育展開力	3.18	0.73	3.20	0.61	0.02
	表現技術	2.97	0.75	3.13	0.61	0.16
課題研究	課題認識と探究心	3.22	0.67	3.17	0.64	-0.05
	教育・保育時事問題	3.24	0.67	3.11	0.63	-0.13

例年と異なる傾向となった理由の一つとして、Ⅰ期の平均得点が例年よりも高い傾向にあったことが挙げられる。2021（令和3）年度入学生の全項目の平均値は3.14であり、これは2020（令和2）年度入学生の2.91、2019（令和元）年度入学生の2.80と比較して高い値であった。一方、Ⅳ期の平均得点は、2021（令和3）年度入学生が3.14、2020（令和2）年度入学生が3.24、2019（令和元）年度入学生3.41となっている。この結果は、2019年度末からの新型コロナウイルス感染症の流行の影響を受けている可能性がある。2021（令和3）年度入学生は、高校2年生の終わりから高校3年生を“コロナ禍”のもと過ごしてきた世代であり、入学当時は、前年度（2020年度）の様々な“制限”が緩和されることが期待されていたものの、結果的には卒業まで“コロナ禍”が続いた世代であった。実際に、様々な行事等は緩和の方向に動いていたものの、本学で1年次に独自で実施している実習（幼稚園観察実習、施設観察実習、施設見学、保育所観察実習など）は直前で中止とな

り、子どもと触れ合う実践経験を含む各種行事（てとて、チャイルドアイランド、交流会）についても、中止または大幅な制限のもとでの実施となった。このような背景を考慮すると、入学当初、“高校生活でできなかったことに取り組みたい”という高い期待と意欲を持って学習に取り組んだ結果、また、本学が“コロナ禍”においても対面授業を中心に授業を進めたことが学生の満足度や学習成果の獲得につながり、Ⅰ期の高い数字となって現れたと考えられる。一方で、最終的には“コロナ禍”前と比較して、授業等で得た知識を活用する場としての実践経験を重ねていくことが難しかったことにより、その後、Ⅳ期までの得点の伸びにつながりにくかった可能性がある。

しかし、Ⅳ期の得点も、全領域の平均得点は3.14であり、2020年度入学生（3.24）、2019年度入学生（3.41）と比較すると低いものの、依然として3点（おおむね理解できた）を超えている。さらに、Ⅳ期において3点を下回った項目は「教育の理念・教育史・思想の理解」（2.97）、「保育の社会的・制度的・経営的理解」（2.99）の2項目のみであり、2020年度入学生の6項目、2019年度入学生の5項目よりも少ない結果となっている。このことから、新型コロナウイルス感染症の流行による様々な影響は受けながらも、全ての領域・項目について、学習成果の獲得が偏りなく一定の水準まで行われたと言えるだろう。

Ⅰ期からⅣ期の変化の詳細について、次の表には各期における平均評定値を示した。Ⅰ期からⅣ期の平均得点の推移について検討するために、これら4時点について、一元配置分散分析を行った結果、大きく4つのタイプに分類された。4つのタイプそれぞれにおける4時点の平均評定値の変化過程はタイプにより異なっており、それぞれの時期の継時的変化の特徴ごとにタイプとして、図にまとめた。

表　平均評定値の時期変化

		Ⅰ期 1年次 8月	Ⅱ期 1年次 2月	Ⅲ期 2年次 9月	Ⅳ期 2年次 2月	F値	多重比較	タイプ
人間性	*M*	3.17	3.08	3.12	3.18	1.25 *n.s.*	なし	3
	SD	0.56	0.60	0.51	0.58			
他者との協力	*M*	3.35	3.28	3.23	3.21	4.04 **	Ⅰ>Ⅲ・Ⅳ	4
	SD	0.48	0.45	0.50	0.53			
コミュニケーション	*M*	3.29	3.06	3.37	3.28	11.03 ***	Ⅰ>Ⅱ, Ⅱ<Ⅲ・Ⅳ	2
	SD	0.57	0.63	0.47	0.52			
幼児教育についての理解	*M*	3.01	2.82	2.88	3.05	6.03 **	Ⅰ>Ⅱ, Ⅱ・Ⅲ<Ⅳ	1
	SD	0.65	0.60	0.62	0.51			
保育についての理解	*M*	3.02	2.91	2.89	3.07	4.78 **	Ⅱ・Ⅲ<Ⅳ	1
	SD	0.61	0.61	0.58	0.53			
子どもについての理解	*M*	3.11	2.91	2.91	3.05	6.34 ***	Ⅰ>Ⅱ・Ⅲ, Ⅲ<Ⅳ	1
	SD	0.64	0.60	0.64	0.55			
教科・教育課程に関する基礎知識・技能	*M*	2.93	2.86	2.88	3.05	4.85 **	Ⅱ・Ⅲ<Ⅳ	1
	SD	0.64	0.52	0.59	0.53			
保育実践	*M*	2.98	2.94	3.13	3.12	4.28 **	Ⅱ<Ⅲ・Ⅳ	2
	SD	0.64	0.64	0.60	0.55			
課題探求	*M*	3.23	3.10	3.09	3.14	2.13 *n.s.*	なし	3
	SD	0.62	0.63	0.62	0.58			

$^{***}p < .001$, $^{**}p < .01$,

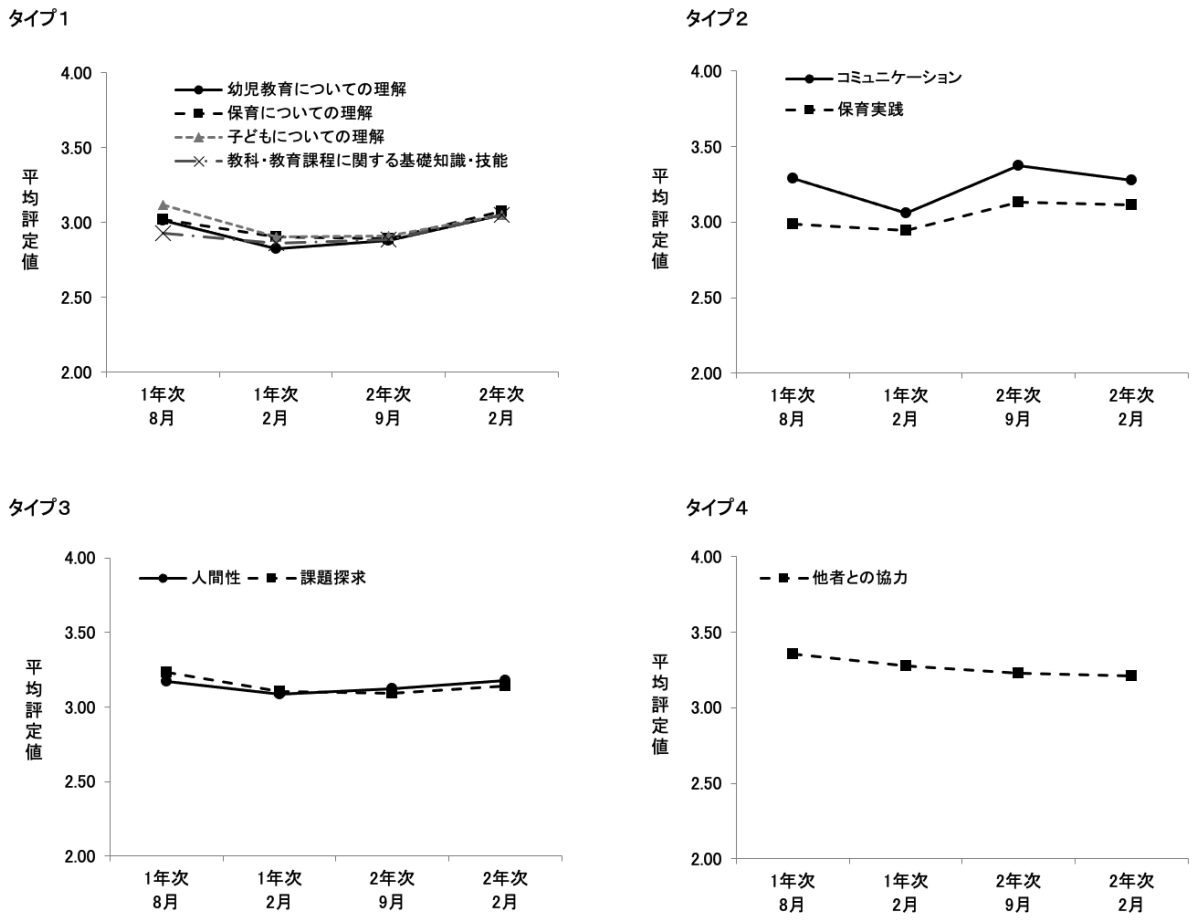

図　学習成果の自己評価の特徴的な変化

それぞれの特徴として、平均評定値の4時点の変化が、Ⅰ期からⅡ期およびⅢ期にかけては一時的に低下または大きな変化がなく、Ⅲ期からⅣ期で増加する領域（タイプ1)、Ⅰ期からⅡ期にかけて一時的に低下また大きな変化がなく、Ⅱ期からⅢ期で増加する領域（タイプ2)、Ⅰ期からⅣ期の間変化が見られなかった領域（タイプ3）とⅠ期からⅣ期にかけて徐々に低下する領域（タイプ4）の大きく4つのタイプを推察する結果が示された。

まず、タイプ1は、＜幼児教育についての理解＞＜保育についての理解＞＜子どもについての理解＞＜教科・教育課程に関する基礎知識・技能＞の領域であった。Ⅰ期の自己評価得点（3.01，3.02，3.11，2.93）に対し、Ⅱ期およびⅢ期で低下または変化がなく、Ⅲ期からⅣ期にかけて得点（2.88⇒3.05，2.89⇒3.07，2.91⇒3.05，2.88⇒3.05）の上昇が見られている。Ⅰ期の高い得点は、先に述べたとおり、入学時の“コロナ禍”の制限の緩和への期待も含めた学習への意欲のもと、幼児教育や保育、子どもの発達、教科・教育課程などの基礎的知識について学び理解しようとした学習の取り組みの成果が示された結果であると推察される。しかし、1年次で予定されていた実習がすべて直前で中止となり、実践経験や実習に向かう意欲を保つことが難しく、結果として、例年見られていたⅡ期での上昇が見られなかったと考えられる。Ⅲ期からⅣ期の得点の上昇については、実習を終え、自らの課題と向き合ったことで自分自身が理解したと思い込んでいた内容に対する評価を修正し、振り返りを通して更に学びを深め、これまでに得た知識と実習における実践経験が徐々に整理され結びついた結果であると推察される。

タイプ2は、＜コミュニケーション＞＜保育実践＞の領域であった。Ⅰ期からⅡ期にかけて、低下または変化がなく、Ⅱ期からⅢ期にかけての上昇が見られている。Ⅰ期からⅡ期への変化は、タイプ1と同様に、実習中止等による影響が大きいと考えられる。Ⅱ期からⅢ期にかけての上昇は、2年次の本実習（教育実習、保育所実習Ⅰ、保育所実習Ⅱ、施設実習）を通して、子どもや実習先の保育者とのコミュニケーションや、実習の中での様々な実践経験が学生の学びに直接的に影響を及ぼしたと言えるだろう。

タイプ3は、＜人間性＞＜課題探求＞の領域であり、全期間を通して大きな変化が見られなかった理由としてはⅠ期の得点が3.17、3.23とある程度高い値であったことも考えられるが、新型コロナウィルス感染症によるこれまでの行事や社会的な学習が中止または制限・縮小開催となり、体験的な学習が例年と比較して少なく、実践的な学び合いの機会が十分に提供されなかったことが、学習成果の獲得を抑制した可能性がある。

タイプ4は、＜他者との協力＞の領域であった。この領域は、Ⅰ期からⅣ期を通じて得点が3.35⇒3.28⇒3.23⇒3.21とわずかずつ低下している。この結果は、他のタイプと同様に、新型コロナウイルス感染症による実習や行事などの実践経験が例年と比較して少なかったことにより「他者と協力する機会」が減少したことが一つの大きな要因であると言える。また、もう一つの要因として、学生の「他者との協力」に関する意識の変容が生じた可能性が考えられる。＜他者との協力＞の領域の中でⅠ期からⅣ期にかけて特に減少幅が大きかった項目は「他者意見の受容」(3.47⇒3.28)、「他者との連携・協力」(3.57⇒3.23)、「保護者・地域との連携・協力」(3.43⇒3.27）であった。この3項目は、Ⅰ期からかなり高い得点を示しており、“コロナ禍”の中で、前年度と比較して「対面」の機会が比較的戻ってくる中で、授業におけるグループワークや学校生活の中で、積極的に他者と関わり協力することへの期待と意欲を持って学んだ結果であると考えられる。その後の低

下については、① 2年次の実習を通して、実習先の保育者との関わりや実習生としての自らの役割をより強く意識する中で、協力・連携の難しさや奥深さを感じたこと、② 2年次後期の行事（チャイルドアイランド、交流会等）において、開催方法（前年度のオンライン開催から対面での開催）が変更され、見通しを持つことが難しい中で、1年生に指示を出しながら進めていくことの難しさを実感したことなどが挙げられる。このような、困難さも含めた様々な“協力・連携が必要な現場”を経験する中で、＜他者との協力＞に必要な力を捉え直し、また、自らの現時点の力の再評価が行われる中で、得点が低くなった可能性が考えられる。

各領域における平均得点の結果及び分析の結果から、2年間の学校生活において、新型コロナウイルス感染症の拡大防止に伴う学習環境の変化（学内での受講授業のみならず、実習等の学外での学習も含めて）により、様々な領域における継続的かつ段階的な学習成果の獲得の難しさが改めて示された。学習成果は単純な直線増加的により生じるものではなく、時期や環境により獲得される経験の種類によって異なっており、また、その時の学習内容や学習方法、経験する学びによっても領域におけるその成果は変化することになると言える。自身の成長により理解できる事柄が増えることで新たな課題に気づくようになり、成果の到達目標が変化することでより高められるとも言えるであろう。その点では、今回の結果については、「自己評価得点」という観点では大きな伸びが見られない項目が多かったものの、全体的にⅠ期からⅣ期にかけて比較的高い得点を維持したとも言え、これは、本学における入学後の“学びのスタート地点”である1年前期の学習がより充実したものとなってきていることを示唆しているとも言える。また、得点自体の伸びは大きくはなかったが、学生自身の変容による領域・項目の捉え直しや自らの能力の再評価等により、得点として現れない部分での成長・学習成果の獲得があった可能性は十分にある。今後の課題としては、新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことを踏まえて、実践経験の場を“コロナ禍前に戻す”という視点だけでなく“より充実させていく”視点を持つことである。また、学生の自己評価の変容を客観的に捉えるために、項目の見直しや測定方法等に関する検討を継続していくことも必要となるだろう。